

『哲学探究』第四版はどこまで新たな規範となりうるか

丸田 健 (Ken Maruta)

奈良大学

ヴィトゲンシュタインの後期代表作『哲学探究』の第四版が、新たな編者である P.M.S. ハッカーと J.シュルテの手によって、2009年に Wiley-Blackwell 社より出版された(邦訳出版は2020年)。第四版では、多くの有益な改変がある。たとえば従来の第二部の部分に節番号がついたのは、そこからの引用提示や確認を容易にした(他方、節番号の付与は、「第二部」を「第一部」と似た形式であるかに、そして「第二部」を実際よりヴィトゲンシュタインの作業を経たものであるかに見せてしまう編集的介入でもある)。

変更点は幾重にも亘るが、最大の変更は、これまで「第二部」とされてきた部分が、もはや『探究』の一部を構成するものとは見なされなくなった点である。この決定の是非については、いくつかの例外はあるものの、これまでのところ研究者間であまり表立った議論はされていないように見える。新たな判断は正しいのだろうか。この疑問について、本発表では——思想的連関からでなく——テキストの成立や編集の事実的状況の観点から考えたい。

『探究』を最初二部構成で世に出したのは、G.E.M.アンスコムと R.リーズだが、彼らの判断に対しては、第三の遺稿管理人であった——そして編集には加われなかった——G.H.フォン・ヴリクトが比較的早い時期から懸念を表明していた。彼は、編者たちがいつ計画を聞いたのかを問題にし、その計画を聞いたと思われる時期には未だ第二部の原稿は存在していなかったことを指摘した。フォン・ヴリクトの懸念に影響を受けつつ、新編者たちは TS227 の改変計画を裏付ける文書的証拠のなさを指摘しており、それが第四版の形態の大きな理由となっている。

しかし究極的に証拠のなさを根拠とする「第二部」切り離しの判断は、その判断自体も根拠が弱いものであるように思われる。というのも幾つかの状況的事実は——旧編者らの判断の正しさを確認はしないにせよ——少なくとも旧編者らの判断をよりよく説明する、あるいはその判断とかなり整合する、と思われるからだ。『探究』の新編者は、そのことをどう見るのだろうか。それらの事実として、以下のものを挙げることができる。

- ・旧編者自身の手紙による補足情報があり、1948年12月にヴィトゲンシュタインがアンスコムとリーズのそれぞれに語ったことは少なくとも1953年の「編者による注記」よりは具体性があること。
- ・ヴィトゲンシュタインが友人 M. O'C. ドゥルーリとの会話で1949年冒頭に語ったことも、第二部的内容を「私の本」の中に入れようと考えたことを示唆するということ。
- ・TS227を口述した時点で出版しなかったのは、それがまだ未完成であり、それを完成させるために努力をした最終結果が、旧第二部であるかもしれないことを示唆する、

伝記的事実があること。

これらの多くは必ずしも新しい事実ではないが、それらを繋ぎ合わせて全体を見直すことで、『探究』解釈の別の可能性に説得力をもたらさうのではないか。

『探究』第二部批判の流れを作ったのはフォン・ヴリクトだとして、なぜ彼は旧編者の判断に疑問を呈したのか。その根底には、ヴィトゲンシュタイン哲学に関する彼の見立てがある。フォン・ヴリクトは、第二部が新たな出発であるという印象を語っており、これが先入見となって、旧版への疑問を生み出していると思われる節がある。ただしその印象を、『探究』の読解に発展させるような議論はなく、印象は印象であるにとどまっている。第一部と第二部の関連の問題——この問題には新編者も第四版の解説で触れていない——に答えるには、哲学の中味に入る必要がある。本発表ではそのような議論を（別の機会に委ねるために）基本的に避けようと思う。別途されるべき議論の傍証になりうることを、本発表では提示したい。